

令和元年6月14日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04505

研究課題名(和文) 沖縄の染織と暮らしの持続性に関する研究 学校・市民教育に向けた衣生活教材開発

研究課題名(英文) A Study of the Weaving and Dyeing Practice in Okinawa from the Viewpoints of the Practitioner's Consideration of Local Life, Culture and Economics: Toward the Sustainable Lifeway.

研究代表者

松本 由香 (MATSUMOTO, Yuka)

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：70259274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、沖縄の染め織りについて、(1)地域生活でのつながり、(2)地域文化の探求、(3)経済性の探究の観点から調査研究をおこない、染め織りは、つくる人びとの楽しみ・生き甲斐となつて、主体的につくることをうながし、つくる人びとを自立に導いていることが明らかとなった。また家族とのかわり、地域とのつながりをもたらししているといえる。そして離島の高齢化、過疎の暮らしに、楽しみやうおいをもたらすものであることが明らかとなった。染め織りは、たずさわる人びとの生計の手段でありながら、ワークライフバランスがはかられ、家庭や家庭外の仕事の合間におこなわれ、持続可能な生活の形成に役立っているといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果を「沖縄の染め織りと人びとの暮らし 家族と地域文化、経済とツーリズムから考える」と題して原稿にまとめており、沖縄の一般の人びと、中学生・高校生・大学生向けのテキストとして刊行をめざしている。沖縄の染め織り文化は大変貴重で、さまざまな染め織りが現在もおこなわれているが、一般には染め織りは知られておらず、染め織りの人びとの暮らしとのかわりや文化的意義についての本研究成果を、書籍として刊行し、一般にひろく紹介し、教育のなかで用いることには、重要な意義があると考えられる。沖縄の染め織りは、これまで美術工芸的に論じられ、人びとの暮らしの視点で論じたものはないため、本研究成果は有意義である。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have conducted field research from three viewpoints, (1) people's tie with local community life, (2) people's search and explore for local culture, and (3) people's seek for local economic advantage, and we have findings that people engaged in cloth making discover the pleasure and the value of leading a life in weaving and dyeing, and that the practice of weaving and dyeing encourage people to be spontaneous and proactive in them and then to become independent minded. The practice of them also brings intimate relationships in family and community life. In the context of remote islands where aging and depopulation take place, the practice of them has become a source of fun time and pleasant life as well. It is clearly revealed that weaving and dyeing are not merely a source of income but also are contributing to the balancing of work-and-life by practicing in-between time of domestic and non-domestic works, and thus to shaping sustainable lives.

研究分野：教科教育学、生活科学

キーワード：沖縄 染め織り 家族 地域文化 経済 ツーリズム 生きがい ワークライフバランス

1. 研究開始当初の背景

沖縄各地でおこなわれている染め織りは、それぞれに特色があり、その地域の貴重な文化資源である。それらは、歴史的由来がはっきりしたものもあれば、新たに創り出されたものもある。そのどれもが、今までつちかってきた技、知識、感覚、理念、発想、そして意味が持続可能であるようにと願う、つくり手たちによって支えられている。しかしわれわれが**2013～2014**年度に沖縄各地でおこなった染め織りに関する事前調査から明らかなのは、生産者の減少と、高齢化、後継者不足の傾向といったこれまでに指摘されてきた事実である。それと同時に明らかなのは、つくり手の誰もが、この継承問題について多少とも危機感を抱いていて、それを自らが染め織りを続ける意味を見出す源の一つとしていることである。そして、そうしたつくり手が染め織りを続ける意味を主体的に見い出しているのを身近に見ながら、次の世代が自らの意味を染め織りに見い出し、主体的にたずさわらようになってきていることである。このことは教育の現状と結びつけて考えることができ、筆者の一人が、**2013～2015**年度に、沖縄県の小・中・高等学校**300**校におこなった沖縄の染め織り教育に関するアンケート調査から明らかになった。つまり教育現場において、染め織りを教材に取り上げられることがほとんどないこと、しかし、もし冊子、書籍などの教材があれば、それを取り入れることが容易だろうと考える教師が少なからずいることである。このことから、染め織りにどのような熱意を感じるができるのか、どのような意味を見い出しているのか、身近に知る機会が次の世代にあることが、染め織りをめぐる継承問題の軽減に役立つと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、沖縄県の染め織りをめぐる地元の社会・教育・つくり手の状況を視野に入れ、沖縄県の教育指針「沖縄独自の歴史・伝統・文化を継承し、沖縄に誇りをもった人間を家庭・地域と連携し育てる」ことを実現する一つの試みとして、染め織りが、人びとの暮らし、本島・離島の高齢化や過疎化のすすむ暮らしにどのような意味をもつのか、今後の持続可能な生活の形成に、手織布、およびそれらをつかった衣服、服飾小物づくりがどうかかわり得るのか、布・衣服づくりが、現代生活においてどのように人びとの暮らしに結びついているのか、今後結びつき得るのかを中心に考察をおこない、この考察をもとに、地元で発達してきた布づくりについて、若い世代の意識を向上させ、そうした布づくりの継承者不足の改善に役立つような教材製作をする。

3. 研究の方法

沖縄の**19**の染め織り（那覇市の首里織、琉球びんがた、南風原町の琉球絣・南風原花織、読谷村の読谷山花織・読谷山ミンサー、大宜味村喜如嘉の芭蕉布、沖縄市の知花花織、浦添市のうらそえ織、豊見城市のウージ染め、うるま市石川の伊波メンサー織、うるま市与那城の蘭からふ、本部町の琉球藍（山藍）、宮古島の宮古上布、多良間島のたらま紅紬、石垣島の八重山上布、竹富島・石垣島・西表島の八重山ミンサー織、与那国島の与那国織、久米島の久米島紬、小浜島のインド藍（木藍またはナンバンコマツナギ）染織、西表島の芭蕉交布）と文化的に沖縄に近い奄美大島の大島紬を取り上げ、その特徴を、**(1)**地域生活でのつながり、**(2)**地域文化の探求、**(3)**経済性の探究、に分けて、それぞれの生産地で、**2015～2018**年度にかけて聞き取り調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 人びとの暮らしのなかでの染め織りのもつ意味

本研究での調査から、沖縄の人びとにとって染め織りがどのような意味をもつかについて、上にあげた3つの特徴にしたがって述べる。

地域生活と染め織りの伝承・継承

染め織りが、家族・地域の生活にかかわり、人びとにつながりをもたらす役割を果たしていることが、本部町伊豆味の琉球藍、宮古島の宮古上布、小浜島のインド藍染織、久米島の久米島紬、与那国島の与那国織の5つの事例から明らかである。

本部町伊豆味では、琉球藍栽培・泥藍づくりが、づくり手と家族・伊豆味地区、本部町、沖縄県および国の支援を受けておこなわれている。宮古島では、宮古上布の糸績み教室が各地で開催されていて、地域の人びとのコミュニケーションの場になっている。久米島では、日常の暮らしのなかで染め織りをしていて、久米島紬の重要な工程である泥染めをするときに、地域の人々の相互扶助が機能している。与那国島では、島出身者と島への移住者の協力によって、染め織りの伝統を守りながら、それをもとにした創作をおこなっている。これらの事例から、染め織りが、家族や地域の人びとをつなげる役割を果たしていることがわかる。小浜島では、高齢女性たちが、インド藍による染め織りを、各家庭で、家族が祭や行事で着る着物をつくるためにおこなっていて、染め織りにたずさわることが、高齢女性にとっての楽しみや生きがいになっている。また染め織りの仕事は、久米島や与那国島での事例のように、たずさわらぬ人びとの暮らしに必要な家事、育児や家庭外での仕事と、うまく調整しながら営むことができる仕事になっている。

これらの地域の染め織りの事例からいえることは、染め織りが、家族、地域の人びとの暮らしのなかで、ワークライフバランスをもって営まれ、家族・地域の人びとにつながりをもたらす役割をもっているということである。

染め織りによる地域文化の表現

染め織りにたずさわらぬ人びとが、自ら住む各地域の文化を、染め織りによって表現するしかたを、大宜味村喜如嘉、沖縄市の知花花織、多良間島のたらま紅紬、うるま市伊波の伊波メンサー織、読谷村の読谷山花織、那覇の紅型と首里織、浦添市のうらそえ織、豊見城市の豊見城ウージ染め、うるま市与那城の蘭からふの10の事例にみることができる。

芭蕉布をつくる人びとは、芭蕉による「自然布」の意味を解釈しながら、また、知花花織やたらま紅紬、うらそえ織にたずさわらぬ人びとは、それぞれに「昔の暮らし」を考察しながら、それぞれに大切なことを染め織りに込め、表現をしている。伊波メンサー織や読谷山花織にたずさわらぬ人びとは、染め織りのルーツを東南アジアにあると考察して、染め織りに表現している。また紅型や首里織にたずさわらぬ人びとは、それらの染め織りが、琉球王朝文化に由来することを認識して染め織りをおこなっている。さらに地域に根づいた染め織りがなかった地域においては、行政が主導してその地域の染め織りを創造することが、豊見城ウージ染めや、うらそえ織、蘭からふのような事例にある。

これら染め織りの事例から、地域の人びとと行政の双方の相互作用による染め織りをとおした地域文化の表現のしかたは多様であり、染め織りにたずさわらぬ人が、それにたずさわることによって、それぞれの地域文化の考察・探求を始めていることがわかる。染め織りの役割の一つは、そうした人びとの営みをうながすことといえる。

経済性の探究

経済性を考えながら商品となる布・服飾雑貨をつくることに、作り手が集まって織物組合をつくり、後継者の育成をして、独自のさまざまな工夫を重ねてきたようすを、沖縄本島南部の南風原町の琉球絣、石垣島の服飾雑貨づくり、竹富島と西表島の八重山ミンサーや染め織りという4つの地域の事例にみることができる。

琉球絣や八重山上布づくりにたずさわっている人は、染め織りの伝統技法を再考して、文様の表し方を工夫している。八重山上布や八重山ミンサーの服飾雑貨づくりの例では、デザインを刷新し、技法の向上を自己啓発しながらおこない、つくることを楽しむ作り手の姿が印象的である。また西表の組合や作家の例では、豊かな自然環境からの恵みに感謝し、自然環境に負荷をかけないものづくりを意識しておこなっている。染め織りは、地域振興やツーリズムの影響とも相まって、商品として量産されてきた面がある。しかし経済性が追求されるだけでなく、それぞれの地域の作り手が、手づくりの意味を再考し、デザインを刷新し、技術の研鑽を続けて、日々、楽しみながらおこなっているようすがみられる。

また奄美大島では、かつて経済性が追求されて大量生産されてきた大島紬が、現在では生き残る工夫として、小規模生産に転換され、沖縄の一点ずつのものづくりが参考にされてきている。

このように染め織りは、経済性追求と並行して豊かな意味の探求をつくり手にうながし、作り手の楽しみや生きがいの源泉となる力をもっているといえる。

(2) 染め織りの作り手と家族・社会・自然

さらに、染め織りの作り手個人、作り手と家族、作り手と社会、作り手と自然とのかわり方に分けて、本研究の考察を述べることにする。

染め織りをする人びととつくること

染め織りをする人びとが、布をつくりはじめたきっかけについて、最初にみえる。親や親戚が染め織りをしていて、それを見て暮らしたことのように、自分の暮らしのなかに身近にあって、自然に習い覚えて、たずさわようになった例がある。その反対に、染め織りが身近にありながらも、それに興味を抱くことがなく、故郷を離れて都会に出て、外からの視点で故郷の染め織りを見るようになり、それを再認識し、染め織りをするようになった例がある。さらに地元の伝統文化に関心をもつようになり、その一つである染め織りにたずさわようになった例がある。

このようなきっかけで染め織りをするようになった人びとは、琉球絣や八重山上布づくりのように、量産を意識しながら、日課として自然に身体を動かし、作り方の工夫をしている。また染め織りの技術の研鑽を続けたり、自己啓発を、染め織りをとおして実現させたりして、日々の楽しみや生きがいにしている。

日々の創作の営みのなかで、これまでのデザインを刷新したり、沖縄らしさを表現したりするという工夫をすることは、多くの事例でみられる。そして地域文化を再考・考察し、地域文化を独自に表現し創作することもあるが、さらに昔の暮らしやルーツを考察したり、王朝文化の歴史をたどっていくこともある。

つくる人びとと家族

染め織りをする人たちは、家庭の一員であり、家族とのかかわりのなかで染め織りをしている人たちである。久米島の作り手たちは、家事や育児などの家庭の仕事やパートタイマーなどの家庭外の仕事の合間に染め織りをして、久米島紬をつくっている。与那国の作り手は、

子育てしながら自分のペースで与那国織をつくり、ワークライフバランスを整えながら染め織りをしてきた。また宮古上布のづくり手は、日々、機の前に座って織るのが、自然に日課になってきたという。さらに、家業として家族で生産をおこなう事例も多くみられる。

つくる人びとと社会

染め織りをする人びとは、染め織りによって、地域のつながりを生み出している。宮古島では、宮古上布の細かい糸績みが難しく、糸績み教室が島内各地に設けられていて、づくり手とともにひろく一般の人びとが、宮古上布の保存の大切さの認識を共有するのによい場になっている。小浜島では、婦人会活動や高齢者の染め織りによって、毎年恒例で織布展が開催され、染め織りは島の高齢者の楽しみ、生きがいとなっている。久米島でも、づくり手が、地元の人びとに染め織りを教えてチューターとなることで、染め織りが地域ケアの役割を果たしている。伊豆味では、家族で泥藍づくりがおこなわれ、現在、親族によって続けられ、琉球藍葉づくりを、伊豆味地区や本部町、沖縄県が支援し、さらに文化庁が支援している。また石垣島では、服飾雑貨をつくる会社が、近隣の地域の染め織りを、展覧会を開催するなどして紹介し、地元の染め織り文化振興に貢献している。

づくり手たちは、活動を組織的にするために事業協同組合をつくり、技術の研鑽、デザインの再考、後継者育成の事業をおこなったり、伝統の継承と創作に努めたりすることに、地元出身者と外来者とが協力することがみられる。

さらに行政主導で新たな染め織りがつくられ、地域の人びとが参加して、地元に基づいた事例がある。

つくる人びとと自然

つくる人びとが、自然環境とかかわりながら染め織りをしたり、染め織りをとおして身近な自然の営みとつながりを再確認したりすることがある。沖縄本島北部の国頭や西表の豊かな自然から、染料や素材を、自然に負荷をかけないように必要な分だけ採集して染め織りに使うこと、そして、自然の恵みを芭蕉布や交布、ミンサー帯に込める例がある。きれいな海の力をかりなければできない染め織りもある。布を海晒しにすることと、サスティナブル・デザインとが、づくり手の意識によって、つながることがある。

(3) まとめ

さらに、「2. 研究の目的」であげたいいくつかの問いの答えをまとめていきたい。

一つ目に、染め織りが、沖縄の人びとの暮らし、地域ケアにどう役立っているかについて、染め織りは、つくる人びとの楽しみ・生きがいとなって、主体的につくることをうながし、つくる人びとを自立に導いているといえる。また家族とのかかわり、地域とのつながりをもたらしているといえる。

二つ目に、染め織りは、沖縄の離島の高齢化、過疎の暮らしにどのような意味をもつのかについて、小浜島の事例のように、家事や外での仕事が一段落した後の老後の楽しみとなり、高齢となってもできるので、染め織りは、高齢女性の楽しみや生きがい、自立を導くものになっている。

三つ目に、今後の持続可能な生活の形成に、染め織り、それをつかった衣服、服飾雑貨づくりが、どうかかわり得るのかについて、染め織りは、たずさわる人びとの生計の手段でありながら、ワークライフバランスがはかられて、家庭や家庭外での仕事の合間におこなわれ、持続可能な生活の形成に役立っている。

四つ目に、布・衣服づくりが、現代生活において、どのように人びとの暮らしに結びついてい

るのか、結びつき得るのかについて、染め織りは、つくる人びとが、経済性を探究しながら地域文化を表現することをうながし、その家族、また社会や自然環境とかかわっておこなわれているといえる。

5. 主な発表論文等

〔学術論文〕(計 8 件)

1. 松本由香・佐野敏行：『2018年度科学研究費・基盤研究(C)報告書：沖縄の染織と暮らしの持続性に関する研究 学校・市民教育に向けた衣生活教材開発 課題番号 15K04505』琉球大学教育学部、2019。
2. 松本由香・佐野敏行：『2017年度科学研究費・基盤研究(C)報告書：沖縄の染織と暮らしの持続性に関する研究 学校・市民教育に向けた衣生活教材開発 課題番号 15K04505』琉球大学教育学部、2018。
3. 松本由香・佐野敏行：「沖縄の染め織りと暮らしの持続性に関する研究と教材開発 経済性の探究にともなう生産性とツーリズムおよび経済性再考の視点からの教材化」『琉球大学教育学部紀要』第93集、琉球大学教育学部：pp.81-95、2018。
4. 松本由香・佐野敏行：「沖縄の染め織りと暮らしの持続性に関する研究と教材開発 地域文化をどう探求・表現するかを教材化するために」『琉球大学教育学部紀要』第92集、琉球大学教育学部：pp.313-334、2018。
5. 松本由香・佐野敏行：『2016年度科学研究費・基盤研究(C)報告書：沖縄の染織と暮らしの持続性に関する研究 学校・市民教育に向けた衣生活教材開発 課題番号 15K04505』琉球大学教育学部、2017。
6. 松本由香・佐野敏行・長田真理子：「沖縄の染め織りと暮らしの持続性に関する研究と教材開発 染め織りがもたらす地域生活でのつながり」『琉球大学教育学部紀要』第90集、琉球大学教育学部：pp.27-50、2017。
7. 松本由香・佐野敏行：『2015年度科学研究費・基盤研究(C)報告書：沖縄の染織と暮らしの持続性に関する研究 学校・市民教育に向けた衣生活教材開発 課題番号 15K04505』琉球大学教育学部、2016。
8. 松本由香・長田真理子：「中学校家庭科における染め織り教育の可能性」『琉球大学教育学部紀要』第88集、琉球大学教育学部：pp.187-204、2016。

〔学会発表〕(計 6 件)

1. 佐野敏行：「沖縄の染め織りの歴史と暮らしとのつながり」第50回日本風俗史学会大会シンポジウム(招待講演)2018年12月2日(琉球大学)。
2. 松本由香：「沖縄の染め織りの現状とこれから」第59回日本風俗史学会大会シンポジウム(主催講演)2018年12月2日(琉球大学)。
3. 松本由香・佐野敏行：「沖縄の染め織りと暮らしの持続性に関する研究 経済性の探究にともなう生産性と観光化の問題および経済性再考の視点からの教材化の試み」日本家政学会第70回大会2018年5月27日(日本女子大学)。
4. 松本由香・佐野敏行：「沖縄の染め織りと暮らしの持続性に関する研究と教材開発 地域文化をどう探求・表現するかを教材化するために」日本家政学会第69回大会2017年5月27日(奈良女子大学)。
5. 松本由香・佐野敏行：「沖縄の暮らしの持続性に関する研究と教材開発 染め織りがもたらす地域生活でのつながり」日本家政学会第68回大会2016年5月28日(金城学院大学)。
6. 松本由香：「沖縄の染め織り素材・布とサステイナブル社会」第45回繊維学会夏季セミナー(招待講演)2015年7月31日(北九州国際会議場)。

〔その他〕

松本由香のホームページ：<http://w3.u-ryukyu.ac.jp/uminaibi>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：佐野 敏行

ローマ字氏名：(SANO, Toshiyuki)

所属研究機関名：奈良女子大学

部局名：研究院生活環境科学系

職名：教授

研究者番号(8桁)：20196299